

Title	<批評・紹介> 清水泰次著「中國近世社会經濟史」
Author(s)	岩見, 宏
Citation	東洋史研究 (1951), 11(2): 181-184
Issue Date	1951-03-25
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138914
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

中國近世社會經濟史

清水泰次 著

昭和二十五年六月 東京西野書店發行
A5判 二二一頁 定價二六〇圓

久しく明代の社會經濟史に開拓の歟をふるはれた清水博士が、此の度表記の一書を世に出された。筆者も同様な對象を研究する後學の一人として、大きな期待をもつてむさぼりよんだことは言ふまでもない。讀んでみると、さすがに多年の蘊蓄を洩らされただけあつて、驅使された史料の豊富なること、考察の微に入り細を穿つて遺漏なきを

期してをられることなどは、餘人の追隨を許さぬものと見受けられ、特に明代の地志や文集を見る機会にあまり恵まれぬ筆者などは、徒らに歎息を繰返すのみである。しかしながら、かく言ふことは必ずしも筆者の期待がすべて満たされたといふことではない。以下簡単に内容を紹介した上で、その點にもふれてみたい。もとより望蜀の言なることは知つてゐるけれども。

さて本書の表題は近世社會經濟史となつてゐるが、内容は明一代の租税史の中から、顯著な事象を摘出して解明されたもので、「税糧」「折納」「條鞭」「軍餉」の四章に分けられ、これに首尾に序説と結語の各一章がついて、都合六章から成つてゐる。内容がなくなつてゐるについては、序文に「社會經濟の中でも田税を主とした譯は、中國人口の七八割迄は農民であり、經濟の半ば以上は租税關係によつて占められてゐたからである」と理由を述べられてゐる。第一章は此の立場から第二章以下の問題の展開を略説されたものである。

第二章「税糧」では、第一節「税率・税額」において、明史食貨志に見える明初の税率税額に關する記載を検討し、特にそこに税の等則が唯一つしかなかつたやうに記されてゐる點の誤を詳細に論證されてゐる。第二節「重租田・没官田」では、前節の問題に關係して前者を民田中の重則田、後者を官田の重則田と考定された。第三節「夏税・秋糧」では、此の兩種目の内容を検討し、特に農桑絲の問題を詳論した上で、夏秋兩税の關係に言及されてゐる。

第三章「折納」は第一節「明初の折納」において本色折色の意味を述べ、明初の折納が政府の都合で行ふものから民間の都合のものへと移つて來たと論じ、折納の本義を割引納といふ點に求めてをられる。第二節「折納の展開」では、洪武年間の雑多な折納品目が、永樂中か

ら次第に鈔に統一されてゆく傾向にあることを證し、鈔と銀との關係にふれて金花銀成立の地盤が考へられてゐる。次いで第三節で折納發展途上における最大の標識たる「金花銀」について、内容と名稱の二、面から考察されてゐる。

第四章「條鞭」では、その年代、内容、利弊の三節にわたつて一條鞭法の種々相が詳説されてゐるが、特にその内容は次の五項目に要約されてゐる。即ち「税役の複雑な品目を一條に統合した。里甲を單位に税役の額を定めてゐたのを、廣く州縣以上の單位に擴めた。十年一度の力役を毎年平均の銀納に改めた。一回の全納を數期に分納した。」(一二三頁)。

第五の「軍餉」の章では、軍餉問題を嘉靖萬曆の兩朝に分けて述べられてゐるが、はじめに明初以來の邊防について略述し、次いでアルタン汗侵入以來の軍餉を論じ、軍餉加派の魁として嘉靖三十年の加派の意義を強調せられる。萬曆朝の軍餉に關しては、専ら遼餉についてその財源、年次、厘毛、地域、歲額と項を分けて述べ、最後に重税としての影響に及んでをられる。

結語は本文を離れて明代の社會經濟史を概説されたものである。

さて以上の如き内容を盛つた本書を通讀して、感じた所を卒直に述べさせてもらふと、全體として今少し一貫性のある敘述がはしかつた。はじめに引用したやうな博士の立場からすれば、租税問題が中心となるのは當然のことであり、従つて經濟社會を構造的に把握しようとする者からは不満も出ようが、それは別として單に本書を租税史として見ても、なほ整つたものとは言ひ難いであらう。それは田賦と並んで農民の重要な負擔となつてゐた力役について殆ど述べられてゐないからである。たとひ力役を租税の一種と見ることに問題があるとし

ても、少くとも一條鞭法の由來を考へる上に力役が無視できぬ意義を持つことは疑ない。更に又本書に扱はれた問題だけについてみて、各章が殆ど獨立論文の形をとつてゐて、一應年代順の配列になつてはゐるが、序説に述べられた所だけでは、各章のつながりが明確に印象されない憾みがある。たとへば折納の章においては、明初から正統元年の折銀令の出るまでは詳述され、最後の節でその後金花銀以外にも折納銀があつたとは記されてゐるが、それではさういふ折納銀がいつ頃からいかにして成立したのかは、金花銀の説明の詳しいのに比して、少しも説かれてなく、金花銀から一條鞭法へのつながりがよく判らない。一條鞭法の章でも、卒然として條鞭の年代から説き起されてゐるが、此の中間の時期について今少し親切な敘述のほしい所である。要するに、結語で述べられたやうな明代の社會經濟史の中で、本文に扱はれた諸問題がいかなる位置を占めるかといふ點を、もう少し明かにして頂きたかつたのである。

次に細い點ではあるが、筆者の腑におちなかつた所を記して、博士の御高教を仰ぎたい。その一つは金花銀（正統元年からの折納銀が最初からかく呼ばれたのでないことは、博士も述べて居られるが、暫く通例に従つて此の名稱を使ふ）と鈔との關係である。博士は實錄の宣德七年以後に見る鈔法の通じたことを述べる記事をあげて、明初は鈔を流通せしめんが爲に銀の使用を禁じたが、禁じ切れないで金花銀が出てきたといふ説に修正を加へ鈔法がやゝ通じたので銀の禁止を續ける必要がなくなり、銀の通用が公認されて金花銀となつたと説かれる（九〇頁）。しかしこれは果してどうであらうか。博士のあげられた鈔法の通じたといふ記事は、宣德年間では宣德七年のもの一條のみであり、その後のものとして正統三年のもの二條がある。即ち金花銀以

前のものは一條だけである。今此の記事を無條件に認めて、鈔が流通してゐたとすればどういふ事態が考へられるか。銀は太祖以來使用を禁じられてゐたもので、鈔が流通してゐる以上祖法に反してまで銀の使用を公認しなくとも、經濟界の用は鈔によつて辨ぜられる筈であり、米麥の折納が必要であれば、永樂以來の慣例を承けて折鈔すればよい。もし鈔が不足だからといふのであれば、別に銀の併用を許さなくとも鈔を増發すればよい（實際は鈔の發行が多すぎるので流通の圓滑を缺いたといふ意見の下に、課程鈔を増すなど回收策が講ぜられる事情であつた）。とにかく博士の述べられた所からは、銀の使用を公認せねばならなかつた理由は出てこない。況や明朝の鈔は周知のやうに最初から不換紙幣として發行されたもので、強力な保護政策なくしては充分な流通を期待し難い。今遽に銀の使用を許して鈔との競争に任せるならば、忽ち鈔價が暴落して鈔法不通の現象を呈するであらうことは、火を賭るより明かだと言はねばならない。實際鈔の値は、宣德末年まで銀の流通が表面禁止されてゐたにも拘らず、下落の一途をたどつて居り、洪武八年の發行當初には鈔一貫は米一石銀一兩に相當してゐたものが、米一石に對して洪武三十年には二貫五百文となり（洪武實錄同年三月甲子）、永樂二十二年には三十又は二十貫（洪熙實錄同年十月壬寅朔及び同年同月癸卯）、更に宣德四年には五十貫（宣德實錄同年九月壬子）となつてゐる。以上の三例は何れも米の代りに鈔を納附せしめる際の公定換算率で、財政政策上實際よりも米價を高く見積つてある懸念があり、又米價は年の豐凶によつても變動があるから、以上の數字を以てそのまゝ一般的な鈔價を判定することは危険であらうが、逆に政府が米の代りに鈔を支出する場合を見ると、宣德八年において十五貫と定められてゐる（宣德實錄同年三月庚辰）。

何れにしても此の頃の鈔價が發行當初に比してよほど下落してゐたことは疑なく、かくては鈔はもはや發行當初に意圖された如く高額の取引に與ることは困難で、その點到底銀の敵ではあり得ない。このやうな値である上は、鈔が流通したといつても、その機能が既に變つてきて銅錢と相似たものとなつてゐたと考へざるを得ない。このことを傍證するものとして、少し後の正統十三年に、鈔は流通してはゐるが銅錢の方が優勢だからといふので、銅錢の使用を禁じた事實がある（正統實錄同年五月庚寅）。此の時には鈔價は更に下落して、一貫が錢二文にしか當らなかつたといふ。とにかく、正統元年に田賦の銀納が發令されたことは、鈔法が通じて銀を禁ずる必要がなくなつたからではなく、やはり鈔が銀に壓倒され、どうしても折納は銀によらねばならなくなつたからと見るべきであらう。特に折銀令の直接の動因となつたのは、博士も引用して居られる實錄の記事（九二頁）に見えるやうに、官僚の俸給問題であつたが、もし鈔が當初の價値を維持してをれば、鈔で俸給を支拂ふことで問題は難なく解決したであらう。

これに關聯して、宣德年間既に官僚の銀に對する需用を窺はしめる事實がある。萬曆會典卷一五七、兵部早隸の條に、「宣德間令して隨從早隸の應當を願はざる者は、每名月に柴薪銀一兩を辨ぜしむ」といふ記載がある。隨從早隸とは官僚個人に配屬される役人であるが、官僚は給與の乏しいのに苦んで、彼等から賄をとつて柴薪の費に充て、早隸の役を免ずるのが一般の風となつてゐた。たまたま此の事實が帝の知る所となつて、その結果右の如く發令されたもので、大政纂要は事を宣德四年十一月に繋げてゐる。こゝに注意すべきは、この事實は役の折銀納の最初の例であつて、田賦のそれが正統元年であるに比し、一步を先んじてゐるとしななければならない。普通銀納は田賦に始

まつて役に及んだ如く言はれて居り、博士も亦その見解に従つて居られる（四頁）が、事實は右の如くであり、而してその端緒が官僚の俸給問題から開かれた點は同じである。かく考へれば、第三章で折納が政府の都合によるものから民の都合によるものに變つてきたとされることも、大いに問題になつてくるやうである。

此の外にも示教を得たい點はあるけれども、紙數に限りあること故、徒らに愚論を連ねることはやめ、最後に不學の末輩がみだりに大先輩の高著をあげつらつた罪を謝して博士の御寛恕を願ふと共に、博士が今後とも蘊著を洩らして後學を啓發せられんことを希望してやまない。

（岩見 宏）

前 號 補 正

頁 行

誤

正

25 上 18

原額辦鹽丁烟戶

原額辦鹽鹽丁

26 下 2

引用文の下に（光緒兩淮塩法志卷一四二）を

補入

27 上 17

引用文の下に（光緒兩淮塩法志卷二六）を補入